



Osaka Gakuin University Repository

Title	自己喪失の病－“A Rose for Emily”における共依存性について Losing One's True Self : Co-dependency in “A Rose for Emily”
Author(s)	長谷川 嘉男 (Yoshio Hasegawa)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 62 号 : 1-27
Issue Date	2010.12.31
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

自己喪失の病－“A Rose for Emily” における共依存性について

長 谷 川 嘉 男

Losing One's True Self : Co-dependency in “A Rose for Emily”

Yoshio Hasegawa

William Faulkner の “A Rose for Emily” に関しては、従来より南部と北部の対比、「時間」のシンボル、語り手と「町」の関係などが作品解釈上の重要な鍵と見做され、また心理学やフェミニズム理論からのアプローチも試みられてきたが、¹ 就心理学的アプローチ（特にフロイトのエディプス・コンプレックス理論に基づいたもの）は今日でも有効と思われる。Jack Scherting は、この作品の異常な父娘関係をこの理論によって読み解こうとする批評家の代表格である。しかしながら、この父娘関係（ひいては、作品の中心主題）をこの視点だけで解き明かすことができるだろうか。Scherting は彼女の父に対する Emily のエディパル（Oedipal）な愛着を物語の根幹と見て、その論拠として、Faulkner 自身による解説、テキスト中の後景に追いやられた娘と前景に立ちはだかる父の “silhouette” を収めた “tableau” のイメージ、² 父の死の事実を彼女が頑強に否定し続けたこと（123-24）、物語の初めと終わりに言及

される父の肖像画の存在(120, 129)などを挙げて、この娘の父への強い愛着が彼女の Homer との関係を完全に支配する事実を力説している。³ Scherting が挙げる論拠のうちで特に注目すべきは、上述した Faulkner の解説である。

In this case there was the young girl with a young girl's normal aspirations to find love and then a husband and a family, who *was brow-beaten and kept down* by her father, a selfish man who *didn't want her to leave home* because he wanted a house-keeper, and it was a natural instinct of—repressed which—you can't repress it—you can mash it down but it comes up somewhere else and very likely in a tragic form,...⁴ (強調は筆者)

この解説を根拠として、Scherting は父が Emily に彼へのエディパルな欲望を他の男性に向けて解消することを禁じたがゆえに、その父への欲望は Homer に対して父の代理の形をとらざるをえないのだ、と言うのである。⁵ 彼女が父への強い愛着—それはエディパルな領域に属すると言っていいだろう—を抱いていたことは否定できないであろう。特に彼女の父の死の事実の拒否はそれを支持すると思われる。しかし、そもそも彼女はなぜ父にかくも強く惹かれるのか。彼女はフロイトが述べるように、娘として父親に愛情を持つのか。⁶ 勿論彼女が深層心理のうちで父を愛し、彼の愛情を希求した可能性は十分に考えられる。まして彼女が外界との接触を断たれ、父に頼る以外に生きるすべを持たないという環境に置かれたことを考量すれば、このことは首肯できる。

しかし、Emily の父への執着には、フロイト的文脈で見る以外の別の要因が関与しているのではなかろうか。そうした問題意識を抱くのは、若い女性としての性的可能性を閉ざしてしまった父に対して、彼女は愛情とは裏腹に、反発やある種の憎しみを覚えなかったのかという疑念に捉われるゆえである。父の死後語り手は、彼女が置かれた状況を簡潔に説明している—“We

remembered all the young men her father had driven away, and we knew that with nothing left, she would have to cling to that which had robbed her, as people will”(124)。この引用中の“that which had robbed her”が何を指すかは議論の分かれるところだが、これが「父と、父の存在そのものが表すもの」を示すとすれば、父の死後彼女に残された財産は家屋敷だけ(“the house was all that was left to her”[123])という窮状の中では、彼女に残された選択肢は、父への恨みや憎しみを抱きつつ新しい、別の人生を歩むよりは、やはり父の思い出に縋って生きるしかなかったのか。しかしそれにしても、問題はなぜ彼女がそれほど父に執着するかである。私は、そこには単なるエディパルなコンテキストでは解明できない別の要因、彼女と父との共依存関係が潜在すると考えるが、この点を明らかにするには、テキストに戻ってこの父娘関係を改めて洗い直して見なければならない。

I

Jefferson の町の住人であると見做されるだけで、誰とは特定できない語り手(作者は主として彼を複数の一人称で表す)の視点が紡ぎだすこの物語では、主人公である Emily Grierson の内面を読者は直接に覗くことはできない(語り手が彼女の語る言葉を伝えるのは、物語の初めの部分の市議会の代表者たちとの対決と、彼女の砒素購入時の薬屋とのやりとりの二つの場面においてのみである)。しかし、語り手が提供する限られた情報の中で、読者に対して、彼女と父の関係を直接に、あるいは極めて暗示的に示す箇所が二つある。その一つは、先に言及した“tableau”のイメージである。これは父娘の姿を直接に写しだす唯一の情景であるので、ここで改めて引用したい。

We had long thought of them as a tableau, Miss Emily a slender figure in white in the background, her father a spraddled silhouette

in the foreground, his back to her and clutching a horsewhip, the two of them framed by the back-flung front door.(123)

この情景が映しだすのは、適齢期の娘から彼女に言い寄る男たちを追い払う父親の姿であるが、これは単に娘を他人の男に奪われたくないという、横暴で自己中心的な（Faulkner は彼を“selfish”と評している）父親の心理を覗かせるだけなのか。この場面に関して、“[Emily] was brow-beaten and kept down by her father”と言う Faulkner の言葉と考え合わせれば、これは娘を手離したくないという父親の身勝手さを示すだけではなく、その底には父の娘への虐待⁷が伏在しているのが感じられるのである。だが、ここで「虐待」ということを持ちだせば、その動機を説明しなければならないが、テキストにはそれを完全に解明する材料は与えられていない。ただ、Faulkner は長野において、“[Emily’s] tragedy was, she was an only child, an only daughter”⁸と語っており、このことがわれわれに一つの道筋を示してくれる。つまり、父は Emily を一人娘として溺愛したと考えられるのであり、それと母不在の事実（作者はこの家族に母が不在であった理由は一切語っていない。ただ言えるのは、Emily が適齢期のころには既に母はいなかったことである）とを勘案すれば、彼が娘を溺愛しつつ母の役割の代理を強要した可能性が浮上してくる。具体的には、彼女の「悲劇」は一人娘だったことだという Faulkner の解説は、父の娘に対する通常以上の親密性を暗示するとも取れ、彼が娘に母親役以上の妻の役割をも求めた蓋然性すら彷彿とするのである。⁹しかし一方で、父が娘の求愛者を退けたのは名門の一人娘に相応しい相手に不足したゆえだとも言えよう。¹⁰この見解にはそれなりの正当性はあるが、だが、それだけだろうか。この父親には隠された個人的な動機があったのであり、前掲の、長野におけるコメントも含めた作者自身の解説は、彼が娘を肉体的に求めたことの証拠とは決してならないが、少なくとも彼女に精神的な意味で妻の代理となることを期待していたふしも窺われ、それを含めて娘に対する彼の態度を「虐待」と呼ん

で差しかえなかりょう（さらに言えば、求愛者たちを退けた“horsewhip”も、それが孕む暴力的なイメージは娘への虐待の秘かなシンボルとも見られる）。

さらに、父と Emily の関係の実態を仄めかす二つ目の箇所は、彼女に及ぼす父の影響の強烈さを述べる語り手の次の言葉である—“that quality of her father which had thwarted her woman’s life so many times had been too virulent and too furious to die”(127)。これは、Homer が最後に姿を消してのち、およそ6ヵ月間彼女が外出しなかったことに対する語り手のコメントであるが、彼女が長期間家に閉じこもったことと父の支配力の強さを結びつける語り手のこの視点は、この二つを連動させるがゆえに意味があるのではなかりょうか。なぜなら、語り手は彼女の蟄居には父親のいまだに続く支配が原因であると言うと同時に、彼女が「家の外」に出ることができなかったことを強調しているからである。つまり、彼女は恐らく早くから Grierson 家という自由を奪われた環境の中で過ごさざるをえなかったのであり、その要因には名門の誇りによる孤立と、南北戦争終結以後における南部貴族階級とその後の社会変化の波を受けた一般社会との乖離¹¹などが微妙に絡んでいようが、それにはやはり、「家の外」に出ることを許さぬ父の強い力が働いていたからではなかりょうか。その強い力とは彼女を引き留め、支配する彼の虐待をも思わせる抑圧が齎すものに違いない（引用文中の“virulent”と“furious”という形容詞[特に前者]はそれを指し示す）。

しかし、それにしても Emily は、たとえ自由を奪われた環境にあったとはいえなぜ父から逃れようとしなかりょうか。名家の一人娘としての矜持と義務感がそれを許さなかりょうか。そればかりではあるまい。彼女が父のコントロールに反発し、彼から逃れようとしなかりょうか、彼女が父に対して共依存の関係にあったからだ。共依存に関して、Charles L. Whitfield は次のように定義している。

...co-dependence [is] any suffering and/or dysfunction that is associated with or results from focusing on the needs and behavior of others. Co-dependents become so focused upon or preoccupied with important people in their lives that they neglect their True Self.¹²

彼によれば、「共依存」とは、大切な人の欲求を中心に考え、それに集中するあまりに自らの真の自己を見失う状況を言うのである。さらに彼はこうした子供の共依存性と親の生活態度との関りについて、“The more deprived, more severe, or advanced the parent’s and family condition, the less the child’s needs tend to be met”(25) と述べて、両親のいずれかが経済的、あるいは精神的に問題を抱えている場合、子供の欲求は無視されたり、抑えられる傾向があることを指摘している。続いて彼は、こうした親の状況をリスト・アップして表しているが、その項目中特に興味深いものは、—

Extreme rigidity, punitive, judgmental,

Non-loving, perfectionistic,...

Child abuse—physical, sexual, mental-emotional, spiritual (26)

—である。

ここに提示された、子供の共依存の引き金となる親の性格の特徴はまさに Emily の父に該当する。その「極端な厳格さ」を備え、「懲罰的」で、「批判的」で、「愛情に欠けた」人間像は彼女の父を彷彿とさせる。特にこのリストに「児童虐待」が加えられていることは、先に言及した両 Friel の説(注7参照)もあり、Emily に対して何らかの形で父の虐待が行われていた可能性を改めて想起させる。先に引用した“tableau”のイメージに見られる一種の遠近法的表現は、娘への虐待の象徴と捉えることもできる。つまり、前景に父を配し、背景に娘を置く構図は、この遠近の距離感が一見父によって娘が庇護された状

況を示すようでありながら、実はそれは父にとって彼女は隷属と同時に虐待の対象であることを物語っているのだ。

このような父の支配に対して Emily が一少なくとも目立った形で一反抗しなかったのは、彼女が共依存の状態に陥っていたからだ。彼女が陥った共依存状態と共通項を有すると思われるのに、Whitfield が提示する次の臨床例がある。それは、慢性的鬱病の母親を持った Barbara (現在56歳) のケースであり、彼女は長年母親の鬱病と、併せて、「冷たく」、「自分と母から距離を置く」父親に苦しんできた自らの家庭生活を、“I viewed my father’s distance and mother’s chronic depression as *my fault* as long as I can remember, and I felt a lot of shame and guilt over it” (33) と回顧している。ここで重要なのは、Barbara が両親の問題を「自分のせい」と感じ、そこから恥辱感と罪悪感を抱いてきたことである。このように、機能不全家族で育った子供たちの多くが、Barbara のように一種の自己否定に捉われることは、この種の家族問題を扱う他の専門家も指摘している。例えば、Claudia Black は、アルコール依存症の父のいる家庭で育ったアダルト・チャイルド¹³の一人である Sharon R. の告白を紹介している。この中で、Sharon (このとき22歳) は “I always wondered whether or not I was responsible for his drinking” と語り、また “I have this affliction that whenever the slightest thing happens I always say I am so sorry” (8) と述べている。こうして、アルコール依存家族を含む機能不全家族で育った子供たちが、前掲の Barbara とこの Sharon のように、親の問題を「自分のせい」と思い込むことは、この事実を Emily と父の場合に当てはめて考えれば、父の自分に対する虐待を彼女が「自分のせい」と感じたことは十分にありうることである。先ほどの Sharon が父の飲酒を自分の責任にしたように、Emily も妻のいない寂しさを父が自分に転嫁するのは、「自分が至らないからだ」と自分を責め、父を非難するよりも、あるアダルト・チャイルドと同様に “how I could help him” (7)¹⁴ と思いを悩んできた姿が想像される。Black はまた、親などによって虐待された者た

ちが自分たちを「犠牲者化」し、彼らが "...unable to access any anger or indignation that comes with being hurt,... or even abused"(72) という、虐待に対して無反応な状況に陥ることを指摘している。さらに、被虐待者が相手の行為を有害であるとしないのは、そうすればよけいに無力感を招くからだ(73) と述べている。

このように、機能不全家族で生育した子供たちの多くと同様に、Emily の場合も親から虐待されても責めを相手よりも自分に向けたとしたら、そういうことが起こるのは一体なぜなのか。この Emily の問題に重なると思われる、被虐待者の虐待者に対する心理的メカニズムの問題に鋭く迫っているのはジュディス・L. ハーマンである。彼女は児童虐待を論じて、虐待を受けた児童が抱く虐待者への病的愛着を次のように述べて、児童の追い込まれた心理状況を強調する。

.....暴力的支配の風土の中で成長する児童のほうが、成人よりもなおいっ
そう虐待し無視する者への病的愛着を起こしやすく、さらに児童は自分の
幸福、自分の現実、自分の生命の犠牲をも厭わずこの愛着関係を失うまい
とする。¹⁵ (強調は筆者)

さらにハーマンは、被虐待児は「虐待を正当化する意味体系」を作り上げるために、「自分は生まれつき悪い子」であり、「自分のほうのせいで両親が自分を虐待する」のだと自分に言い聞かせ、そのために両親が虐待するのなら、「ものすごくがんばりさえすれば、いつかは両親の許しがもらえて」、「庇護とケアとをかちとることもできる」(160)と期待せざるをえない、悲しい被虐待児の心情を明らかにしている。

ハーマンが描き出す被虐待児のこうした心理的メカニズムがどの程度 Emily に適合するかは検討を要する。第一に、彼女が父から虐待を受けたとしても、その時期がハーマンが対象とする児童期とは特定できない。しかし、

彼女が恐らく思春期以降に父親から「情緒的」虐待を受けたことは事実であり、それによって彼女は何らかの心理的外傷を蒙ったことは十分にありうる。よし、その外傷が児童期に受けたものほど深刻なものではなくとも、少なくとも彼女の人格に深いダメージを与えたことは否めない。しかし彼女はその外傷からの回復の道を父に対して怒りをぶつけることに求めず、ハーマンが言うように、自分が悪いのだと決めつけることによって、「[父]の悪を自分の中に取り込むことによって、[父]への一次的愛着を維持」(163)しようとするのである。

さらに、Emily が父から虐待を受けても彼から逃れようとしなかった理由がもう一つ考えられる。それは、彼女が一種の監禁状態に置かれていたことである。つまり、「長期反復性外傷は監禁状態という条件」下に起こり、「反復性外傷は犠牲者が加害者の監視下にあつて逃走できない被監禁者である場合に限って」(111、強調は筆者) 生じうるものである。先述したように、Emily が母不在であり、父と二人きりの状況下における Grierson 家という自由を奪われた空間に閉じこめられた存在であったことは、その実態は文字通りの「監禁状態」ではなかったものの、象徴的には父による「監禁」下にあったと言えるのではなからうか。父に逆らつて家を捨てることは、彼女にはその育ちと経済的理由からできなかったのではないか。さらに、家庭内暴力では「加害者は被害者が自分との関係以外の人間関係一切を断つこと……を求める」(114)というハーマンの記述の持つイメージの禍々しさを抜きにすれば、その基本的方向は “We remembered all the young men her father had driven away” という、語り手の情報の意味内容と一致すると言わざるをえない。Emily は、このような家庭環境の中で父の支配を受けながら、父の愛情をひたすら請い願わなければならなかったのである。¹⁶

II

Emily と父の関係をこのように分析したとしても、作品にはなお大きな謎

が残されている。それは、彼女の Homer 殺害に纏わる謎である。殺害の動機については、さまざまな見解があるものの、なお依然として不分明である。この点について Judith Fetterley は、父の死後 Emily は彼女自身が「父」になり、自分に対する父の暴力を Homer にふり向けたと論じる。¹⁷ Homer を何らかの形で父の身代わりとしたとする見解¹⁸ は多いが、そうした見解もそうだが、父の暴力への復讐という視点を採る Fetterley にしても、父の暴力が、なぜ、どのような経過をたどって Homer に転じたのかが明らかにされていない。Emily が生前の父から虐待を受けても彼への病的愛着を保ちつづけたことは先述したが、しかし、父の死後彼女の父に対する態度は変化したのだろうか。私は彼女の父に対する態度は基本的には変化していないと考えたい。彼女の態度が変化したとしたら、それは Homer との関係が発生して以降、具体的には Homer という媒体があってはじめてある変化が起こったのではなからうか。

具体的に述べる。語り手は、父の死後長い間病気であったのち再び目にした Emily の姿を、“her hair was cut short, making her look like a girl, with a vague resemblance to those angels in colored church windows—sort of tragic and serene” (124, 強調は筆者) と、描いている。このイメージからは父を失ったあとの彼女の心境の変化が窺えるが、それと同時にどこか一人前の成熟した女性らしくない、ある種の「子供っぽさ」(“a girl”、“those angels”)が見え隠れする。この時期の彼女に付与されたこのような「子供っぽさ」は、Whitfield が専門家による共依存の23の定義を挙げている中での、その一つ—“A psychological disorder caused by a failure to complete psychological autonomy...necessary for the development of the self, separate from parents”¹⁹—を想起させるのであり、このことはこのときの彼女が父への共依存、父への心理的依存性から脱却できない、いや、むしろそれにどっぷりと浸かっていたことを物語っているのではなからうか。つまり、Homer を殺す決意は、この依存性が彼と出会ってのちに彼という媒体を通じてのある変化を契機に彼女の中で生じたのではないかということである。だがこの点は、彼女

の彼の殺害の時期とそのときの彼女の容姿に関ってくるのだ。

読者は Emily が砒素を購入したとき、彼女が “still a slight woman, though thinner than usual” (125) であったと知らされている。このときは父の死後1年以上経過していて、彼女は30歳を過ぎており、いとこたちが訪れていた(125)。Homerの姿が最後に目撃されて(いとこたちが出て行ってから、3日以内に彼は一旦戻っている[127])から、彼女はおよそ6ヵ月家に閉じこもっていた(127)。そして、Faulknerは次に人々が見た彼女の姿を、“she had grown fat and her hair was turning gray” (127) と記している。ここで問題になるのは、彼女がいつ砒素を Homer に用いたかである。悪臭が彼女の家から漂いはじめたのは、“two years after her father’s death and a short time after her sweetheart...had deserted her” (122) であることからして、彼女が砒素で Homer を殺害した²⁰のは、人々が彼の姿を最後に見てからそんなに長い時間が経たないうちに、つまり、砒素購入後数ヵ月以内であろうと考える(Faulknerは砒素購入を父の死後1年以上 (“over a year” [125]) 経過したときと規定し、悪臭の流出を死後2年を経たときとしているが、上の “over a year” という表現は時間を曖昧にしか特定しない)。従って、彼女が砒素購入から数ヵ月以内に Homer を殺害したとしたら、彼女は殺害時にはまだほっそりとして、やせていたと思われる(肥って、髪の毛が白髪まじりになりかけた彼女が人々の目にとまるのは、Homer が最後に目撃されてから約6ヵ月後である)。

このように、私が Homer 殺害時の Emily の容姿にこだわるのは、彼女自身が「父」になり代わって父の暴力への復讐を Homer の肉体にふり向けるという指摘の論拠を、彼女の変身 (“from the slender figure in white to the obese figure in black whose hair is ‘a vigorous iron-gray, like the hair of an active man’”²¹) に求める Fetterley のような言説に保留を呈したいからである。彼女が Homer に出会ったのは、父が亡くなった年の夏であるが、このときの彼女は父への思い、父への共依存性を払拭できず、共依存の新たな

対象を無意識に求めていたと思われる。彼女にとっては Homer がその新しい対象であったことは容易に推測される。しかし、Homer は彼女が「依存」できるような相手ではなかった。語り手は Homer を “a big, dark, ready man” として、その性格の一端を、次のように描出している。

Pretty soon he knew everybody in town. Whenever you heard a lot of laughing anywhere about the square, Homer Barron would be in the center of group.(124)

Emily が Homer に惹かれたのは、彼が体現する、父と共通する行動力のある、男性的なその側面であろうと思われる。しかし、語り手は、“Homer himself had remarked—he liked men, and it was known that he drank with the younger men in the Elks’ Club—that he was not a marrying man”(126) という彼の別の一面の情報を提供している。「自分は結婚なんてしない男だ」というこの彼の発言を全面的に信用できないとしても、少なくとも Faulkner は彼と Emily の関係の意味を読者に示唆するつもりでこの情報を提供したことは確かである。彼は彼女と結婚して Grierson 家という黴臭い空間に閉じこめられるような人間ではなかったと言える。従って、Emily には、彼に父のイメージを重ねて彼に「共依存」することは容易にかなわなかったと思われる。彼女は父の「虐待」にあって「真の自己を見失つ」た状態にあっても(あるいはそれゆえにこそ)、父に「しがみつく」²² ことを止められなかったが、それに対して Homer に「依存」できなかったのは、彼が彼女に「世話を焼かれるようなタイプではなかったからである。さらに、共依存の特徴の一つに「親密性からの逃走」が指摘されるが、それは共依存者には「対等で親密な関係」の形成を避ける傾向があるというものである。つまり、対等な関係では「相手に格別な弱みや依存性が見当たらない」²³ からである。ゆえに、彼女は Homer に対して「対等な関係」を望まず、父の場合と同様に彼に「依存」することを望

んだと思われる。しかし、恐らく彼はそれを冷たく拒否したであろう。²⁴

Homer の殺害を Emily が決意したのは彼に「依存」することが不可能であると認識した瞬間であると思われるが、だが、このことについて考察する前に確認したいのは、共依存者の相手に「依存」する意思是、相手を「支配」、「コントロール」したいという欲求と多くの場合裏腹になっているということである。Schaeff は、共依存者の有する利他性には自己中心性が潜在すると主張する。彼女によれば、彼らは相手の抱える問題を自分ですべて解決できると考え、相手の思考や感情にすら自分が責任を持つのだと思ひこむのである。²⁵ Schaeff が言うこの自己中心性を、信田さよ子は、共依存者の抱える「自己否定感、空虚感を他者への関心とコントロールで埋めるという関係のもち方」²⁶ と言い換えている。Emily が Homer に「依存」することが不可能であると実感したとき、彼女の心に浮上したのは彼を「支配」したいという欲求であるが、この支配欲は、H. B. という頭文字を刻んだ “a man’s toilet set in silver” と寝間着まで含んだ “a complete outfit of men’s clothing” (127) を彼に贈ろうとしたその行為に顕現している。父に対して自己の「空虚感」をぶっつけ、彼をコントロールすることでそれを埋めることができなかった Emily は、Homer を殺害することでそれを果たそうとした。彼を物言わぬ物体と化することで意のままにコントロールしようとした。それは、彼が死体となることではじめて可能となる作業であった。彼女が彼の死体と実際に添い寝したのか、あるいはしたとしたりどのくらいの期間そうしたのかは種々の議論のあるところだが、添い寝していたとしたり（死体の横の枕に残っていた “a long strand of iron-gray hair” [130] はその有力な証拠であろう）、それもそうした彼女のアブノーマルな欲求の表象と言えよう。

ところで、Faulkner は、物語の最後に秘密の部屋に横たわる Homer の死体について次のように記述している—“now the long sleep that outlasts love, that conquers even the grimace of love, had cuckolded him” (130)。これは解釈の分かれる一文であるが、文中の “long sleep” は「死」を表し、

Emily 自身が「死」の代理となって、意思を持たない Homer の肉体から「愛」を奪い取っていたことを暗示するのではなからうか。従って、彼女には、父の虐待が遠因ではあっても、父の身代わりとして Homer に復讐する意識は直接にはなかったと思われる。ただ、彼女は父によって齎された心の空洞を Homer の肉体(死体)によって埋めつくそうとしただけではなからうか。だが彼女は、父のクレヨン画の肖像が物言わぬ物体であっても彼女の精神を支配しつつけたように、Homer の死体に宿り、それを「支配」することによって逆説的で倒錯的な生を獲得したとも言えるのであり、彼女にとって彼の死体は自らの精神的な甦りの証ともなったのである。

III

これまで語り手の役割を閑却したまま論を進めてきたが、ここでこの問題を取りあげねばならない。Emily についての物語の持つ意味は、語り手の存在なくしては十全に明らかにならない。この点に関して Isaac Rodman は、語り手が「町」とはアイロニックな距離を持っていることを強調し、彼の声には表面上の語り(「町」の代弁者としての側面)とより深層における彼自身の、醒めた、「町」とは孤立した声の二つが含まれていると述べている。²⁷ この Rodman の指摘は首肯しうるものであるが、ここでそれを吟味する前に、作品における Emily が窓辺に姿を現す場面—彼女の「シルエット」が映しだされる情景—に着目したい。彼女の窓辺のシルエットを描く場面は作品に3ヵ所あるが、このうちの2ヵ所を引用する。

- ① As they [four members of the Board of Aldermen] recrossed the lawn, a window that had been dark was lighted and Miss Emily sat in it, the light behind her, and her upright torso motionless as that of an idol. (123)

- ② Now and then we would see her in one of the downstairs windows—she had evidently shut up the top floor of the house—like the carven torso of an idol in a niche, looking or not looking at us, we could never tell which. (128)²⁸

先ず②に注目したい。この彼女のシルエットの描写で特に重要なのは、“looking or not looking at us, we could never tell which”と語り手がわざとらしく付け加えている点である(勿論、屋敷の“top floor”の閉鎖への言及によって「秘密の部屋」の所在を暗示しているのも大事であるが)。なぜなら、これは語り手がEmilyの意識の所在に読者の注意を意図的に喚起していると思われるからであり、彼女の窓辺の「シルエット」を見る読者の心理には、「彼女はわれわれを見ているのだろうか、見ていないのだろうか」という語り手の問いかけによって、自分たちはいま彼女のシルエットをこうして見ているが、彼女自身は自分たちのように何か^{●●●}に映った自分自身の「シルエット」—つまり自己像—を見ることはないのかという想念が同時に呼び醒まされるからである。こうした彼女自身の意識のあり方への関心は(それを直接に示す記述がテキストに皆無であるだけに)「鏡」とそこに映った自己像との関係に結びつかざるをえないのであり、こうなるとここでふと、村上春樹の短編「鏡」が想起されるのである。

村上の『カンガルー日和』所収の「鏡」には、主人公「僕」が若いころに中学校の夜警をしていて遭遇した体験が語られるが、あるとき「僕」は夜中に見回りをし、そのときふと「鏡」に映った自分の姿を見て愕然とする。なぜなら、「僕」は鏡の中の「僕」が自分ではないことに気がついたからである。つまり、

.....外見はすっかり僕なんだよ.....それは間違いないんだ.....でも、それは絶対に僕じゃないんだ.....いや、違うな、正確に言えばそれはもちろん僕なんだ。でもそれは僕^{●●●}以外の僕なんだ。それは僕がそうあるべきではな

い形での僕なんだ。(傍点原文)²⁹

ここには「鏡」に映った「僕」が「僕以外の僕」であると感じることの恐怖が描かれているが、問題にしたいのは、Emily にはこのように「鏡」を対象として「自己」を見るというような、あるいはそこに「自分以外の自分」を発見するというような機会は果たしてあったのかどうかということである。このことに関連して言及しなければならないのは前掲①の引用である。これは男たちが Grierson 家の屋内に侵入して石灰を撒く場面であるが、Fetterley はこの箇所について興味深い指摘をしている。つまり、このとき窓に明かりがつけられて Emily のシルエットが浮彫りになるが、彼女が明かりをつけたのは「彼女が男たちの行動を見ているのが彼らに見えるように」(“so that they may see her watching them”³⁰) そうしたのだと述べていることである。この出来事があったのが真夜中であることから、Fetterley の指摘の通り、Emily には男たちを見る意思があったものと思われ、この部分は彼女の意識の所在を明示するテキストでの数少ない箇所の一つと見做されるのであり、ここからは彼女と「町」の対照(対立)が象徴的な意味合いを持って浮かび上がってくるのだ。このような彼女の意識と「町」との対照は、正しく、先の二つの引用が示している、語り手が持するアイロニックな視点が招来するに他ならないのだが、しかしいまより重要なのは、Emily に「自己」についての意識があるとしたらそれは一体どのような形のものなのか、いや、そもそも彼女は「自己」を映す「鏡」を持つのか、もしそれがあるのならその「鏡」は何かである。

Emily にとって自己を映す「鏡」とは「町」だろうか。勿論、「町」が自分をどのように見ているかについて彼女が全く無関心だとは思えない。しかし、例えば、市会議員たちが税金の請求に訪れたときの彼女の言動や、“with her head high”(126)という姿勢を持して Homer と馬車に乗って行きすぎるときの彼女の様子には、そうした自己の態度に対する「町」の反応は既に織りこみ

ずみであり、彼女にとってそれは何ら驚きでも衝撃でもないものであり、従って、「町」が「鏡」であるとしたらそこに映るのはこれまでと同じ自己、よく知っている自己に他ならなかったと言える。彼女に真の意味で自己を認識する機会が訪れたのは、父との関係が深刻な意味を帯びはじめてからである。

父が Emily を虐待するようになって以降—その始まりはいつとは特定できないが—彼女が適齢期に達したとき、彼女には兄弟姉妹はなく、母も不在であり、彼女にとって真の意味で自己を映す「鏡」は父だったのである。しかしその「鏡」に映った自己は「町」を対象としたときの誇り高い自己とは異なって、ひたすら父の愛情に「すがりつく」く、惨めで卑屈な姿を呈していたのである。この姿は彼女にとって、それ以前とは異なった自分、村上が描いたような、「鏡」の中の「自分以外の自分」と観じられたかもしれない。しかし彼女は、そうした「自分以外の自分」を直視し、自らそこから脱却しようとはしなかった。先に触れたように、共依存者は相手への依存性を失うのを恐れるあまりに相手との対等な関係を避けるが、この状況では彼の眼差しは相手への一方向にのみ注がれ、自己に向けられることは少ない。従って Emily が父を「鏡」として「自己」を知ったとしても、それは彼女の内部では真の自己認識にまではついに至らなかったと言えよう。こうした彼女の限界は、語り手が言及した窓辺の彼女の外観—“looking or not looking at us, we could never tell which”—が孕むその眼差しの不確かさと曖昧さによって象徴的に露呈されているのかもしれない。

さて、Emily はこのように「自己」を直視することができなかったが、一方「町」は彼女に対して常に好奇の目を注ぎながら、彼女を通じて何を学んだのだろうか。彼女に対する「町」の態度に関連して Rodman は、作品のクロノロジーの混乱は「町」の人々にとって都合の悪い材料を物語から排除しようとする彼らの意識を写しているのだと主張する。その具体例として、悪臭と「町」からの Homer の消失が語りのクロノロジーによって分断されていることを挙げ、そこには Emily を殺人者として刑務所に送るまいとする「町」の

意図的な盲目性が瞥見されるのだと論及する。³¹ 語り手が構成するクロノロジーの分断によって浮かび上がるこうした「町」の姿勢は、彼らが終始見せる Emily への好奇の眼差しと通底するが、それはどのようなことか。

「町」の人々の Emily に対する好奇心は、女性たちが彼女の葬儀に参列した理由 (“out of curiosity”) を通じて物語冒頭の第一文で既に示されていたが、彼女の父が亡くなったとき彼女は無一文になって、もうお高くとまっていられず “she had become humanized” (123) となったのだからと彼女を気の毒に思ったり、彼女と Homer が馬車に乗る姿を “jalousies” (125) のうしろから覗き見たりするなど、彼女に対する彼らの注視にはっきりと見てとれる。さらに、彼らは二人の恋愛の進展に応じて、“they were to be married” と思ひこんだり、また “‘They are married’” (127) と言って喜んでみせるのだが、彼女の砒素購入を知ると、今度は “‘She will kill herself’” (126) と態度を豹変させるのである。このように彼女にさまざまな反応を示すのは主として女性たちであるが、しかし女性ばかりではない。男性の中でも、彼女の行為に異議を唱えて “even grief could not cause a real lady to forget *noblesse oblige*” (124) と言う年輩の人たちがいたが、これは特定の価値観を個人に強要するものである。こうした強要ぶりは市会議員たちの彼女の屋敷への侵入にも通じる。彼らの行為は、悪臭に対する市民の抗議を受けての一つの対処であるとはいえ、個人のプライベートな領域である屋敷に無断で侵入するというふるまいは個人の権利を力づくで侵犯するものに他ならない。特に、この市会議員たちの屋敷への「侵入」は、物語のクライマックスに起きる Emily の「秘密の部屋」への「町」の人々の力づくの「侵入」に通底するという点で重要である。³² しかし、ここで考慮すべきことは、彼らはなぜ彼女のプライバシーを剥奪するまでのぞき魔になるのかである。林文代氏はその優れた「エミリーに捧げるバラ」論で、「窓を通してエミリーは見られるものであり、町の人々は見るものである」³³ 点を強調しているが、Emily がなぜ常に「町」の人々に「見られ」、なぜ彼らは常に彼女を「見る」のか、このことにどんな意味が隠されているのかを

考えたい。

「町」の人々が Emily を「見」、彼女が「見られる」という関係が生み出す構図は、両者の間には対等の関係が成立していないことを意味する。ここからは明らかに対象への一方向の視線の存在が感じられるのであり、対象(他者)の内面は無視されている。Emily が「町」の人々をどのように見ているかは、彼らには問題ではないのである(語り手が窓辺のシルエットの場で、「彼女はわれわれを見ているのか、見ていないのかはわれわれには分からなかった」と記したのは、彼女の内面の計り難さと同時に、「われわれ」に潜在する彼女の内面に関するまいとする姿勢を示唆するためとも取れる)。このように、人々が彼女の内面を無視しようとするのは、彼らが彼女を自分たちの内心の欲求を満たす対象としたいという願望を持つゆえである。このことは、言い換えれば、彼ら—特に女性たち—にとっては、彼女が日常生活に存在するさまざまな満たされぬ思い(欲求不満)を忘れさせてくれる手段であったということになろう。彼女たちの、Emily と Homer の恋愛の進展に関するさまざまな反応は、ドラマのヒロインに自分たちの運命を仮託して日ごろの憂さを忘れようとする観客のふるまいに殆ど重なると言える。さらに、物語の冒頭部分で、彼女は「町」にとって“a tradition”、“a duty”、“a care”であったと規定されるが、これらは主として「町」の旧世代の男たちが Grierson 家に対して背負った“hereditary obligation”(119)であって、このことは彼らの価値観、南部の父権的世界観の維持のために Emily は欠くべからざるシンボルであったと言える(新世代の男たちも旧世代の価値観を完全には否定できないでいる。議員たちが彼女を訪問したとき彼女を「レディ」として扱うその様子はそれを示している)。このように「町」の人々は、「町」における自らの位置や価値観を確認したり、あるいは内心の欲求を満足させるために、彼女を利用しようとする。彼らはそれぞれに、自らの目的を果たすために彼女の内面を理解しようと努めず、彼女を“an idol”として祭りあげることに満足するのである。

「町」の人々のこうした Emily に対する態度は、彼らの眼差しが彼女に対

して一方向に注がれる点において「共依存」の特徴と重なるのではなからうか。先に見たように、Schaefer は共依存には自己中心性が潜在すると指摘するが、この自己中心性は当然相手への「支配」と「コントロール」を招来する。この点に関連してさらに Schaefer は次のように述べている—“Since co-dependents feel they have no intrinsic meaning of their own, almost all of their meaning comes from outside; they are almost externally referented” (48)。この Schaefer の見解は、一見「町」が Emily に対してみせる態度と矛盾するように思われる。つまり、「町」の人々はそれぞれに自らの価値観を持っていないわけではない。例えば、悪臭に関して素早い対処を求めた若い市会議員の一人に、“…will you accuse a lady to her face of smelling bad?” (122)とその要求を一蹴してしまう Judge Stevens は南部固有の因習的な貴婦人観を持っていることは明らかであり、それはまた、Emily と Homer の交際を知ったとき、“Of course a Grierson would not think seriously of a Northerner, a day laborer” (124)と醒めた見方をする婦人たちの意識のあり方とも通じるものであろう。だが、問題であるのは、彼らの価値観は南部の伝統的な父権的文化にどっぷりと漬かったものであって、そこには自己を見つめ直す本質的な意味での「自己認識」が存在しないことである。彼らはこの自己認識を欠いたまま、他者に対して自らの存在意義を確認する契機を求め、他者志向性を強めるのである。Emily が彼らから一方的な視線を浴びるのはこのゆえである。

このように、Emily が「町」の人々から一方向の視線を浴びるのは、彼女が「窓を通して見られる」と無関係ではない。つまり、「窓を通して見られる」とは、換言すれば一定の「枠(フレーム)」を通して見られることを意味する。人々が父と娘の“tableau”を目撃する場合も、「開かれたドア」という「フレーム」を通してであるし、彼女と Homer の散歩も「窓枠」という「フレーム」越しから覗かれるし、窓辺の彼女の彫像もやはり「フレーム」を通して目撃される。このように、「フレーム」を通して彼女を見る人々の位置がそ

の「枠」を越えないという点で相手への対面性に自ずと限界があるし、これはまた相手の理解にも限りがあることを物語っている。さらに決定的であるのは、このような「フレーム」の内側から相手(他者)を見る行為には、他者との積極的な双方向の視線のやりとりが欠落する点で、見る側において「自己」を見つめる機会が失われやすいことである。「町」の人々が担うこうした傾向は、殆ど同じ理由で Emily についても言える。彼女が「窓越し」に一「フレーム」の内側から一人々を見るとしたら、それはやはり彼女が自己省察を欠く理由に繋がると考えられる。彼女は自分を見つめる人々の視線すら意識しているのか、していないのか分からないのである。彼女の視線が常に父に注がれ、真に「自己」に向けられないのは、絵という「フレーム」に囲まれた父の肖像画にその視線が集中し、父も「フレーム」を通して彼女を見つめるというその構図からも窺われる。Jefferson の「町」の人々も Emily も、共に自らの欲望の対象である他者にのみ関心を奪われ、真に自己を省みる機会に恵まれないのは大変不幸なことである。

Faulkner が “A Rose for Emily” において描いた Emily の父に対する執着と彼女の Homer 殺害の動機は共依存の重要な特徴に重なるものであった。それは、Whitfield や Schaefer が基本的に指摘する、「自らの欲望や存在感を確認するために他者に依存する傾向」であると言える。こうした Emily の共依存的性向は、彼女が父を「鏡」としながらそこに映った自己像を彼への病的愛着性のゆえに真に直視しなかった彼女の限界を招致するが、それは、窓辺の彼女のシルエットが表すように、彼女が「窓」という「フレーム」を通してしか「町」の人々—外なる世界—を見ようとしなかったその閉鎖性に繋がり、これはまた「町」との関係においても彼女が自己認識の機会を忌避したことを告げている。

一方、「町」の人々も自己の欲望の対象としてのみ Emily を見つめ、その対象との関係に対して真に注意を払おうとしない。こうした彼らの傾向は、語り

手が読者に告げる、彼女の死亡の報を受けた人々が彼女の家に「秘密の部屋」があるのを知りながら(“Already we knew that there was one room in that region above stairs which no one had seen in forty years”[129])、埋葬が滞りなく終了してからその部屋に侵入したという事実と決して無関係ではない。彼らが「秘密の部屋」の存在を知ったのは恐らく彼女の死亡を知ってその家を訪れたときであり、その事前ではないと考えられ、一見、彼女の人権と尊厳に対する配慮に基づくと思われるこの処置は適切であると感じられるが、この配慮には殺人の可能性の事実認識を遅らせようとの彼らの意識が垣間見えるのであり、それはやはり、先に指摘した「町」が担っている「意図的盲目性」と通じあうものであろう。

Faulkner は、この Emily の物語を通じて、自己と他者との関係において、他者を「鏡」として自己を直視するという意識を欠いた状況が、Emily においても、彼女との関係性にある「町」の人々においても潜在することを、アイロニカルであり、且つ客観的な語り手の視点を通して描いている。自己の真の姿は外界の事象(人としてのレベルでは他者)に映してしか分からないのであり、このことの認識が Jefferson というアメリカ南部の小さな町の人々に欠落していることを Faulkner は暗に示そうとしているのである。こうした状況は、換言すれば、Emily と共に「町」が一種の「共依存」の罠に陥っていることを告げており、彼は Emily の物語を通じて顕現した彼女と「町」の自己認識欠落の傾向を、南部社会が帯同する同じ傾向の象徴として表現し、自己認識を欠くことの恐ろしさをわれわれに警告しているのではなからうか。

注

1 これらの視点による読解とは別に、Emily と Victoria 女王との類縁を指摘した、Gary L. Kriewald の興味深い論文(“The Widow of Windsor and the Spinster of Jefferson: A Possible Source for Faulkner’s Emily

Grierson,” *The Faulkner Journal* 19. 1[Fall 2003])がある。

2 William Faulkner, *Collected Stories of William Faulkner* (New York: Vintage Books, 1977) 123. 以下引用はこの版により、括弧内にページ数を示す。

3 “Emily Grierson’s Oedipus Complex: Motif, Motive, and Meaning in Faulkner’s ‘A Rose for Emily,’” *Studies in Short Fiction* 17 (Fall 1980): 399-401.

4 William Faulkner, *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*, ed. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner (New York: Vintage Books, 1959) 185.

5 Scherting 400.

6 フロイトは、女兒が誕生以来性的成熟のさまざまな過程を経たのち思春期に達したとき、父の子供を産みたいという無意識の欲求を抱くと指摘している (Sigmund Freud, “Beyond the Pleasure Principle, Group Psychology and Other Works.” *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, vol. 18, trans. James Strachey [London: Vintage, 2001], 157)。Cf. Freud, *Standard Edition*, vol. 19, 179, 256.

7 ここで「虐待」という表現を用いるが、これには性的な意味は完全に排除されていない。John Friel と Linda Friel は、親と子の家庭内での境界が弱い場合、両者の間に近親相姦が起りやすいと指摘している (*Adult Children: The Secrets of Dysfunctional Families* [Deerfield Beach, Fla.: Health Communications, 1988] 60)。Emily と父の場合、家庭では母不在であり、この父娘の境界がうすくなっていると思われることから性的関係も可能性としては残されているが、やはりこのケースは両 Friel が挙げている「情緒的相姦」(“emotional incest”[60]) (親が子を情緒的に配偶者の代理と見做す場合)と見るべきであろう。

8 William Faulkner, *Faulkner at Nagano*, ed. Robert A.

Jelliffe(Tokyo: Kenkyusha, 1956) 70.

9 Faulkner は長野で、先の引用に続いて、“At the time when she could have found a husband, could have had a life of her own, there was probably some one, her father, who said, ‘*No, you must stay here and take care of me*’”(強調は筆者)と語っており、この言葉は父の娘に対する秘められた期待を示唆するとも考えられる。

10 テクストから Emily の生まれた年を規定するのは困難であるが、Gene M. Moore (“Of Time and Its Mathematical Progressions: Problems of Chronology in Faulkner’s ‘A Rose for Emily,’” “A Rose for Emily”: *William Faulkner*, ed. Noel Polk [Orlando: Harcourt College Publishers, 2000]) の説に従ってそれを1856年とすれば、南北戦争終結後彼女が適齢期に達したころには名門の男子で彼女に相応しい者が少なかった可能性は考えられる。ある歴史書は、戦争に賭ける姿勢の北部と南部の違いについて、「北部では、地位や財産のある青年が、立派な体格をしていながら平服を着たままでいても、社会的な汚名を着るといことがなくてすんだが、南部では女たちまで気を使って、紳士で軍務を忌避している者がないようにしたのである」と述べ、南部の名門男子の多くが出征し、そして戦死した状況を窺がわせている(サムエル・エリオット・モリソン『アメリカの歴史』2巻、西川正身翻訳監修[集英社、1971]、377)。

さらに、Danforth Ross は、Emily が南北戦争の余波のうちに成人したことを前提に、彼女の父が青年たちを彼女から追いやったのは、多分ふさわしい独身者が戦争で死んでしまったからだとして述べている(“From the American Story,” *William Faulkner: “A Rose for Emily,”* ed. M. Thomas Inge [Ohio: Charles E. Merrill, 1970] 61-62)。

11 作品の冒頭に Faulkner は、Emily が死亡した時点において、南北戦争の敗北によって Grierson 家が蒙った社会変化の影響を、“...garages and cotton gins had encroached and obliterated even the august names of

that neighborhood”と語っている。Grierson 家の屋敷は当時この地域では “an eyesore among eyesores”(119)になっていた。

12 Charles L. Whitfield, *Healing the Child Within: Discovery and Recovery for Adult Children of Dysfunctional Families* (Deerfield Beach, Fla.: Health Communications, 1989) 28-29.

13 Claudia Black は、「アダルトチャイルド」をアルコール依存症の親と暮らした思春期前期の子供や思春期の若者と同時に、成人に達した子供たちを指すと規定している (*It Will Never Happen to Me: Growing Up with Addiction as Youngsters, Adolescents, Adults* [Center City, Minn.: Hazelden, 2002] x)。

14 この言葉は、Sharon と同じく父のアル中に悩んでいた少年 Bill T. の告白中のものである。

15 ジュディス・L. ハーマン『心的外傷と回復』中井久夫訳(みすず書房、1999)150.

16 Emily を共依存者と規定するとき確認しなければならないのは、共依存者の低い自己評価(cf. Whitfield, *Healing the Child Within* 31; Anne Wilson Schaeff, *Co-Dependence: Misunderstood-Mistreated* [New York: HarperCollins, 1986] 15)と彼女の高い矜持との整合性である。名門 Grierson 家の子女としての彼女の誇りは、市議員たちと彼女の対面場面に窺がわれる。しかし父の死後困窮状態に陥り、父の死の衝撃と共に彼女が「喪失感」に苛まれたことは想像に難くない。次の描写—“She carried her head high enough—even when we believed that she was fallen. It was as if she demanded more than ever the recognition of her dignity as the last Grierson” (125)—は彼女に内在する「恥辱感」と「自尊心の低下」と、それらにあらがおうとする名門意識との葛藤を垣間見せる。

17 Judith Fetterley, “A Rose for ‘A Rose for Emily,’” “A Rose for Emily”: *William Faulkner* 125.

18 Homer が父の身代わりであるという視点をとらない見解では、例えば、Ray B. West は、Emily は Homer がずっと誠実であったと偽装するために殺害したと主張する (“Atmosphere and Theme in Faulkner’s ‘A Rose for Emily,’” *William Faulkner: Four Decades of Criticism*, ed., Linda Welshimer Wagner [Michigan: Michigan UP, 1973] 195-196)。また Hal Blythe は、Emily は Homer がホモであったと知ったとき、対面を保つために毒殺したと考える (“Faulkner’s ‘A Rose for Emily,’” *Explicator* 47. 2 [Winter 1989]: 50)。一方 Norman N. Holland は、Emily が父と Homer を共にエディパルな視点で捉えたとしながらも、否定と併合の心理的防衛の立場から、Homer 殺害は彼女が本当は結婚していないことを否定するためのものと論攻する (“Fantasy and Defense in Faulkner’s ‘A Rose for Emily,’” *Hartford Studies in Literature* 4. 1 [1972]: 18)。

19 Charles L. Whitfield, *Co-dependence: Healing the Human Condition* (Deerfield Beach, Fla.: Health Communications, 1991) 10. 彼が挙げるこの定義は、BK Weinhold and JB Weinhold, *Breaking Free of the Co-dependency Trap* (Walpole, NH: Stillpoint, 1989)によるもの。

20 Terry Heller は、(この推測は突飛だと断りながらも) Emily が Homer と数年間屋敷内で一緒に暮らした可能性も否定できないと言う (“‘The Telltale Hair: A Critical Study of William Faulkner’s ‘A Rose for Emily,’” *The Arizona Quarterly* 28. 4 [Winter 1972]: 316)。しかし砒素購入と悪臭の流出の時期からして、この Heller 説には賛同しがたい。

21 Fetterley 125.

22 Schaefer 49. 彼女は共依存の特徴の一つとして「しがみつき関係」(“a cling-clung relationship”)を挙げている。

23 齊藤学『魂の家族を求めて—私のセルフヘルプグループ論』(小学館文庫、1998)196-197.

24 この点での Emily と Homer の関係は、*Light in August* における

Joanna と Christmas のそれを想起させる。

25 Schaefer 59-60.

26 信田さよ子「共依存からの回復とは何か」『共依存—自己喪失の病』吉岡隆編(中央法規、2001) 84。

27 Isaac Rodman, “Irony and Isolation: Narrative Distance in Faulkner’s ‘A Rose for Emily,’” “A Rose for Emily”: *William Faulkner* 82-83, 89.

28 もう一つの Emily の窓辺の姿を描く次の場面—“Now and then we would see her at a window for a moment, as the men did that night when they sprinkled the lime, but for almost six months she did not appear on the streets”(127)—に現れる彼女は、恐らく Homer を既に殺害している。

29 村上春樹『カンガルー日和』(講談社文庫、1986) 81。ついでに断っておかねばならないが、村上が短編「鏡」で物語の最後に明らかにしているのは、この物語では実在の「鏡」は存在せず、それは「僕」の幻想が産みだしたものにすぎず、その状況で「僕」が自分の姿が「鏡」に映ったと錯覚したということである。

30 Fetterley 43.

31 Rodman 86-88.

32 Ruth Sullivan, “The Narrator in ‘A Rose for Emily,’” *The Journal of Narrative Technique* 1. 3 (1971): 164-165. 彼女は、「町」の人々が Emily のプライバシーを剥奪し、その最も過激な形での表れが「秘密の部屋」への侵入であると力説する。

33 林文代「スキャンダラス・アイ/ウイ—『エミリーに捧げるバラ』のモダニティ性」『アメリカ文学ミレニウム—[II]』国重純二編 (南雲堂、2001)、48。ただし「エミリーが窓を通して見られる」点に対する私の視点は、氏のそれとは異なる。